



# KATAWA FANTASY

# KATAWA FANTASY

---

Printed by Order of *FOUR LEAF STUDIOS*

---

Published for Comic Market 92 , *TOKYO*

August 11<sup>th</sup> - 13<sup>th</sup> , *MMXVII*

---

ファンタジー —— その一言を聞くだけで、すぐに幽霊と怪物、英雄たちとその戦い、魔法使いたちの物語が思い浮かびます。アクアブルーのドレス、紫のローブの色彩までもが目に映ることでしょう。この言葉には本当に様々な意味があるにも関わらず、私たちはほぼ同じ事を考えるのはなぜでしょうか？ 厳密には言葉通りの意味であっても、他の空想科学小説は『ファンタジー』とは呼ばれません。魔法や壮大な物語に満ちた世界は私たちの想像力を魅了し、非現実の領域へと誘ってくれるのです。ファンタジーの真の魅力とは、その自由さだと思います。ルールを曲げることも、魔法を使うことも、物理世界の制約を逃れて思索をめぐらせることも自由なのです。ファンタジーというジャンルは何度も書き換えられてきました。バンパイアが書籍や映画、そしてその中間にあるあらゆる作品に何度登場したことでしょう。ルールが存在しないからこそ、キャラクターを自前のファンタジーに登場させ、好きなように使うことができます。

かたわ少女は厳密にはファンタジーではありません。もちろん実話でもありませんが、久夫たちは私たちが住んでいるのと同じ世界に生きています。その同じ世界で不自由を強いられている、ごく普通の人々の物語です。しかし私は、かたわ少女にはある種の魔法があるように思います。その魔力のおかげで、この作品、そしてなによりもそのファンコミュニティが、これだけの長い間にわたり生きながらえてきたのです。そうした思いもあり、今回の本ではいつものアーティストに加えて、かたわ少女のコミュニティからも参加者を募りました。

では準備はいいでしょうか？ 「昔々……」から始まる山久の世界をどうぞごらんください。

















# A Runner's Afternoon

Text by: cpl\_crud

自分の耳で、リズムカルに地面を叩く自分の足音を聞くことにはすっかり慣れっこになっていた。最新の気取ったガジェットから、音楽が頭に流れ込んでくる。俺はそのビートと自分の歩調をゲームのように合わせる。

走ることは俺の習慣になっていた。雨が降ろうが、雹が降ろうが、日が差そうが、仕事の前に三十分走り、昼休みの間に三十分走る。俺は走って、走って、さらに走る。

三度目の生きるチャンスを与えられた人間の人生というのは、こういうものだ。

最初の発作の後、俺の人生はぶちこわされたと思った。残酷なゲームを俺に押しつけた、高いところにいる神様たちに呪詛を吐き、俺は自己憐憫におぼれた。その何が悪いっていうんだ？俺は絶対調だと思っていた時期に打ちのめされ、友達からも引き離されて、新しい環境に無理矢理突っ込まれた。あの時は、俺はすべてを失ったと思っていた。

馬鹿みたいな思春期特有の不満から、俺は自分がわかる唯一の方法で自分の運命に抵抗した。医者への指示に従わなかった。薬をまじめに飲まなかった。ほとんど運動もしなかった。

その報いは迅速で、そして苛烈だった。俺は「喪失」という言葉の全く新しい意味を知った。今は、痛みも耐えるには辛いものになった。

だから俺は走って走って、走り続ける。これが俺の贖罪だ。この十年間、毎日俺は走ってきた。

もう十年になったのか？

プレーヤーの曲が一周したので、俺は前を見て気合いを入れ直す。過去を振り返ってもどうにもならない。俺は上を向いて、前を見て、先を見通さなきゃいけない。

待てよ。

目に入ったその光景が、俺の頭を稲妻のように貫く。この十年間で初めて、俺は走るのを途中でやめ、振り向いた。

公園の池の脇にあるベンチに座っている人がいる。もう何千回もこのベンチのそばを走りすぎたはずだ。でもこの人物が座っているのをみたのはこれが初めてだ。その女性はサンドイッチの端をちぎって池に投げる。あひるが怠惰そうに落ちたところに泳ぎつき、それを食べる。

この世で俺以外の誰が彼女の手を見たとしても、何とも思いはしないだろう。確かに、年月は情けを示したよ

うだ。俺が見覚えのある濃い紫色の痕は、周りの肌とちよつと色合いが異なる程度にまで薄れていた。

「華子？ 華子なのか？」

手の主は振り返って俺を見る。どれだけ心臓病の運動をしたとしても、この瞬間に耐える用意はできなかっただろう。最後に会ったときと場所から何百万年、何百万キロ離れたこの場所に、華子本人が座っている。

華子の特徴だった前髪はなくなっているが、髪は伸ばしていた。いや、そうでもないかもしれない。座ったままではわかりにくい。手と同じように、顔の痕も目立たなくなっていた。

「久夫くん？ どうしてこんなところに？」

華子は俺に気づいて立ち上がる。最後に会ったときよりも成長していた。背は少し高く、そしてずっと大人びていた。

まあ、大人びてるのは当たり前だ。もう大人の女性なんだから……

なんだこれは？ 集中もできやしない。エンドルフィンと乳酸が俺の頭を鈍らせている。集中しろ俺、集中するんだ。過去は過去だ。失ったものはもう絶対に取り戻せないんだ。

「俺、あの、この近くで働いてるんだ。この辺で毎日走ってて、でもお前がいるのは今まで見たことなかったから……うわあ、もうどれくらい経ったっけ？」

華子は少し首をかしげる。くそ、今のは言わなきゃよかった。いやな記憶が華子の頭の中にいっぱいになってるに違いない。ちくしょう、なんてかわいい頭をしてるんだ。今まで誰にも言ったことはなかったけど、華子の頭はかわいい。

「長すぎた……ほんとに長すぎたわね。私、仕事で来てるの。道の向こうのホテルに泊まってる」

華子は後ろのどこかに向かつて手を振る。細かいことは関係ないだろう。それよりも、彼女の物腰が変わったことに驚いた。もちろんその始まりはずっと昔、高校生活の終わり頃から現れていたけど。

あの頃の俺たちの関係は、繭を作っている芋虫のようなものだったと思う。進展はあったけど、それは終わりではなかった。俺の前に立っているのは、蝶となった華子だ。完全に成長しきって、世界へと羽ばたこうとしている。

華子が羽化したときに、俺はそのそばにいなかったということに気づいて、心がずきりと痛んだ。

「へえ、出張か。じゃあ、華子もうまくいってるんだな……」

前触れもなく、時計が鳴り始める。鋭く二回鳴り、一秒間止まる。その繰り返し。今まで、それは回れ右して

仕事に戻る合図だった。今日のそれは俺と古い友達の間打ち込まれたくさびだった。

「やばい、俺仕事に戻らなきゃ。なあ、今日の午後は暇かな？ 今日金曜日だから、少し早く帰るんだ。酒かコーヒーか何か飲みながら話さない？」

「ええ、いいわ。ホテルの近くにいいカフェがあるの。大通り沿いに。『ステートメント』って名前だったと思う」「ああ、それなら知ってる。そこで五時くらいに会えると思う……それとも早すぎる？」

華子は首を振る。短い動きが彼女の長い髪の毛を踊らせる。水晶のイヤリングの輝きがそれを強調する。俺たちがデートしていた頃、華子は一度もイヤリングをしなかった。似合ってる。

「五時でいいわ。じゃあ後でね」

華子は公園にいたときと同じスーツを着ている。薄いグレーで、白いピンストライプだ。誰か他の人が華子のスカートをばけば、「ロング」スカートと呼ばれるだろう。だけど華子のことだ。俺に言わせれば華子の3/4 レングスのスカートはミニスカート同然に見えた。俺は十八歳に戻り、ホルモンの海で泳いでいた。

「もうワインを一本頼んじゃったけど、いいでしょう？ いつまであなたがいるかわからなかったから」

華子の話し方を聞いて、俺はほとんど口がきけないほど驚いた。今になって初めて、俺は華子の声色に気づいた。学校時代には全然注意していなかったのだ。華子に聞かなきゃいけないことがある。たくさんの、意味のない質問を、華子が俺に話し返してくれるものならなんでもいい。

「いや、全然構わないよ。あと遅くなってごめん。思ったより仕事が長引いちゃって。電話しようと思ったんだけど、番号知らなかったから……」

「じゃあ、それは何とかしないとね。あなたの番号は？」

華子の指が携帯の上で踊って、俺のデータを入力していく。最後に俺の電話にかけて、手順を終わらせる。

「さてと、じゃあ久夫くん、最近何してるのか教えて？」

「正直言うと、大したことはしてない。生命保険の会社の保険数理士っていうのをやってる。人がいつ頃死ぬかを計算して、保険を引き受ける価値があるかどうか判断するんだ。15、7年。参考までに言うと、俺にはそれしか残ってない。走るのを始める前は、その半分しかなかったかも。自分の勤めてる会社の保険にだっけ入れ

ないんだぜ」

「辛い話ね」

「まあね。でも請求書を払って十分おつりが来るから、文句は言えないさ。華子はどうなの？ 気を悪くしないでほしいけど、すごく変わったじゃない」

華子は遠くを見るように顔を見上げる。最後に会ったとき以来の彼女の人生を振り返って、大事な出来事を思い返すかのよう。

「そうね、変わったかもしれない。でもいろんなことが起きたから……あのことも……あなたの……ね」

「心臓発作だろ。別にいいよ。言っても」

「ええ、あなたの心臓発作。あれのおかげで、いろんなことを自覚して、それで助けが必要になって、あの場を離れたの」

古い怒りが波となって俺に押し寄せる。あの古ぼけた病院で二度目に目覚めたとき、華子はいなくなっていた。手紙もなし、電話番号もなし、ナースに伝言さえしなかった。俺にしてみれば、彼女は蒸発したとしか言えなかった。

これを言うのは俺にとっては苦痛だけど、それが一番よかったのかもしれない。ようやく華子が自分の顔をあらわにして、自由に話せるほど自信をつけたのを目にするのは、俺の苦しみをいくら積んでも釣り合わないだけの価値がある。

「まあ何をしたにしても、うまくいってるよ！ 率直に言うけど、すごくきれいになった」

「あ……ありがとう」

ああ、「俺の」華子は完全に失われたわけじゃないのかも。華子のほおが真っ赤に花咲き、魅力的だけどころだたくもある、あのどもりが戻ってくる。

ワインが運ばれてきて、ウェイターがそれぞれのグラスに注ぐ。二人とも軽食を注文すると、ウェイターは陰に退き、俺たちはまた二人きりになる。

「とにかく、あの……場所を……離れてから、私は大学に戻ったの。専攻も変えて、今はこうして、レビュー記事を書いている」

「レビュー？ 何の？」

「ホテル、食べ物、着るもの……何でもよ、ほんと。世の中いろんな雑誌とか、ウェブサイトとか、新聞とか、

旅行ガイドとかがあるから……全部足せば、レビューの需要はたくさんあるの。だから私も書いてるってわけ」

「へえ。それは思いつかなかった。楽しい？」

「請求書を払って十分おつりが来るから」

「そっか」

二人ともワインに口をつける。最初の近況報告的な会話が終わった後、お互いにあまり話すことがなくなる。かつて俺たちがデートをしていたとき、二人の関係は会話で成り立っていたわけではなかった。どちらかというとお互いの利益のために、とでも言うべきか。

食事が届き、話さずにも口実ができるけど、それもワインと一緒にすぐになくなってしまふ。華子がもう一本ボトルを頼み、ウェイターがダイニングスペースからラウンジに移らないかと尋ねる。

「旅行のレビューを書くって言うってたけど、どこかおもしろいところに行つた？」

「行つたけど、行つてないの。私書いている旅行レビューのほとんどは作り話だから。いろんなすてきな場所のことをたくさん読んで、ほんとに行つたように見せかけるの」

「それって詐欺じゃないか？」

「そうでもないわ。私書いているような雑誌を読む人たちは、そもそも旅行なんて絶対行かないから。だから、代わりに旅行に行つた気分らせてあげるとってわけ」

「じゃあ、華子は嘘をつくことでその人たちの役に立ってるってわけだ」

「世の中はそういう風になってるのよ、久夫くん」

ワインが効き始めている。この「新しい」華子もムードに乗つてくつろいでいるようだ。二本目のボトルも来たときと同じくらいあつという間になくなり、ウェイターがもう一本頼むかと尋ねる。

「ワインは嫌いじゃないけど、次はウイスキーのロックにするよ」

華子はその言葉にしばらく考え、おもしろいけど覚えにくい名前のカクテルか何かを注文する。

華子のホテルの部屋は、今風の銀色の内装が施された、いい部屋だった。部屋の目玉は、普通ホテルといえばそういうものだが、ベッドだ。そしてその上で華子と俺は抱擁する。

最後にこうして出会ったとき、俺は処女の華子とセックスをした。  
だが今夜、俺は大人の女性となった華子と愛を交わす。

カーテンの隙間から陽光が差し込んでくる。どうやら俺たち二人とも、カーテンのことは気にしなかったらしい。

華子はもう起きていて、ブラウスのボタンを留めていた。俺は少し体を動かして、華子の枕からシャンプーの残り香をかぐ。ココナツっぽい。俺は一人笑う。これだけの年月の後、華子と俺はまた一つになったのだ。この世のすべてがうまくいったような気がする。

「おはよう」

「あ、あの、おはよう、久夫くん」

ほとんど無意識に、俺は華子が左の薬指をもてあそんでいるのに気づく。明るい朝日の中で、その指の付け根に紛れもない薄い色の皮膚が帯となっているのが見える。

つい最近まで、華子は指輪をつけていたのだ。

「ひ、久夫くん……あなたに言わないといけないことがあるの……」

沈黙が毛布のように俺たちに覆いかぶさる。華子が言ったことを理解しようとして、時速百万キロで頭が回転する。考え得る一つ一つのシナリオが感情を呼び起こし、混ざり合い、溶け合って、俺の心の中で荒れ狂い、やがて個々の感覚が消えてなくなる。恐怖、怒り、無気力、自暴自棄がぐるぐると渦を巻き、やがて絶望と忘却の底に俺は引きずり込まれる。どんなにがんばっても、それが表情に出してしまうのを押しとどめることができない。

「……大丈夫だよ。俺がついているから」

哀れな声が漏れ出る。呪いを解こうとするかのような。そう言いつつ、この息詰まるような沈黙の覆いを破るには、今の自分の声はひ弱すぎたことを自覚する。

華子が何か言おうとしているけど、その言葉の重さに押しつぶされそうになっているのがわかる。俺と同じように華子の心にも混乱が渦巻いているのだろうか。

「ど、どうして、来てくれなかったの？」

心の中の嵐が止み、とどろくような精神の波濤もその場で凍り付く。華子の声は学校にいたときと全く同じだった——臆病で、ひび割れて……怯えていた。

「俺は……」

「あなたが……いなくなつてから……私はもう耐えられなかった。リリーは会いに来てくれたけど、でも離れないといけなくなつて。私待つてた、ずっと待つてたのに……」

昨日の自信に満ちていた表情はみんな溶け落ちてしまつていた。感情の重さに熱せられて、華子の冷静で落ち着いた外面は涙となつて流れ果て、落としていなかったメイクの上に跡を作る。しゃくりあげると、左の手の甲で乱暴に顔を拭う。

「……でもあなたは来なかった。だからあきらめなきゃいけなかった。本当にがんばつて、あなたを頭の中から追い出そうとした……」

また華子が薬指を弄び、その根元の柔らかな皮膚を見つめる。幻肢痛に似て、それは華子自身が指輪が戻ってくるのを、懐かしい感触がその細くて繊細な指に戻るのを望んでいるかのようにだった。

俺をとらえていたショックが徐々に緩んでいく。話の核心を見逃していたような感覚を覚える。

「どこで……どこで待つてたんだ？」

十年前の、あの日のもやのような記憶を必死でかき分ける。リリーと一緒に北海道の別荘に行った。あそこは本当に好きな場所だった。都合五回、夏になるたびに遊びに行った。最高の思い出だ。休みの時にしかリリーは行けなかったから、俺たちはその機会を大いに満喫した。もちろん、さわやかな田舎の空気に触れて気分は高揚したし、そこに酒も入るとなれば……

でもたったそれだけのことだ。違つたか？ ある夜に調子に乗りすぎてしまつて、翌朝に胸が苦しくなつてきた。放つておけば二日酔いと一緒になつていくと思つていただけで、そうはいかなかった。夕暮れ時には救急車のお世話になつた。いつ意識を失つたのか、よく覚えていない。救急車に乗つたという記憶を自分で捏造したのかもされない。そのときのことを思い出そうとしても、詳しいことが何も浮かんでこない。

生者の世界に戻ってきたのは、たつぷり三十六時間後のことだった。その時にはもうみんななくなつていた。

いくつか手元の電話番号に連絡してみたけど、誰も捕まらなかった。華子と俺はあまりに身を寄せ合っていたから、大学でもあまり親しい友達を作らなかったし、二人の関係にとって負担となってもいいと思えるような人は一人もいなかった。

華子の携帯にかけても誰も出なかった。やがてその電話もつながらなくなった。避けられているのかと思った。最初の心臓発作のときのように。でも今度の相手は絶対に思いを遂げられないガールフレンドじゃない。俺にとつての全てだった、ただ一人の女の子に捨てられたということだ。

消毒剤漬けの地獄から解放されたその日から、俺はジョギングを始めた。毎日欠かさずだ。もう二度と『失う』まい、と俺はその時に誓った。

実家に近い大学に転学して、卒業しやすい学部を選んだ。ここは楽だった——長くやっていれば、確実にどこかで学位を取れる。山久の知り合いには一度たりとも連絡を取らなかった。あの耐えがたい学校で受けた苦しみには、焼け付くような嫌悪しか感じなかった。

しかし、孤独に打ちひしがれていたときでさえ、俺は枕に向かって華子の名をささやいた。華子が姿を現してくれることを願って。時が怒りを洗い流していくにつれ、俺が失ったものはもう決して取り戻せないのだと気づいた。俺は頭の中で華子に話しかけていた。日々の出来事を、そして隣にそれを分かち合える人がいたなら、人生がどれほど楽になるかということ……

脳内で愛と憎悪が狂犬のように円を描き続け、ついに正面衝突する。泡立つ唾液と血を唇に滲ませながら、相手を圧倒してやろうと争いあっている。

「悲しい場所」

またしても、渦を巻いていた精神が急停止する。

悲しい場所……何を言ってるんだ？

華子の表情が歪む……どうやらうっかり口から漏れてしまったらしい。怒らせてしまったようだ。正面切つて彼女を侮辱したかのよう。

「私……あのとき……もう耐えられなくなった」

一瞬、昨日の再会のことを思い出す。心臓発作のことを話したとき、華子は少し動揺していた。俺の病気のこ

とを話題に出したくないからだと思っていたけど……でも……

「待つてくれ……俺が気絶した後、華子はどうなったんだ？ あの後のはよく覚えていないんだ」

また華子が手で顔をぬぐい、丁寧なメイクにピカソの出来損ないのような筋を作る。喘ぐようにすすり泣きながら、落ち着きを取り戻そうとする。意識して規則正しい呼吸をすることで、涙が自然に引き起こす反応を抑え込もうとしているのがわかる。もう何百回も同じ事をしてきたかのように、辛抱強く自分を落ち着かせる。感情を取り囲み、自分自身の中に封じ込めている。

華子はそのやり方を知っている。いや、違う。誰かが教えたんだ。

「私もあの日の後のことはあまり覚えてない。あなたが連れて行かれてから……私……体の震えが止められなくなった。リリーはきつと大丈夫だからって言うてくれたけど、でも震えが止まらなくて。その後は……わ、私、わからない。きつと気を失ったんだと思う。目を覚ましたら……あの場所にいたから」

「あの場所？」

華子は目をさつと右にずらすと、顔をわずかに俺から背ける。まるで恥じるかのように。

「あの……悲しい場所。病気じゃない人たちが、良くなるために行くところ」

そんなバカな。まさか華子を……

「……精神病院に？」

今度も、言葉が口から出るのを抑えられなかった。華子が言葉で否定する前に、その体が反応してしまう。

俺の心は沈む。棄てられるという経験を俺なんか語れるわけがないじゃないか。俺のくだらない『失恋』物語なんて、華子の人生そのものとは比べようもない。

愛する人を二度も失う恐怖に、華子の心は耐えられなかったんだ。

畜生。

愛憎の犬たちさえ相争うことを止めてしまった。戦う意志はもう失せきっていた。

もう一度だけでも電話をかけていたら。自己憐憫にふけらずに、もう一度リリーに連絡を取ることができていたら……そうすれば……

華子がようやく、テーブルの上のティッシュの箱からちり紙を取り出す。そこにあるのを忘れていたんだろう。ホテルの部屋に泊まると、よくそういうことが起きる。でも自分の涙を拭くかわりに、華子はそれを俺に手渡す。

「何を……？」

「あなたの顔……」

頬に涙が伝い、ベッドシートにしみを残す。俺はまだ服も着ていない。冷酷なまでに白いホテルのリネンが、俺の悲しみででたらめな形の灰色に汚れていく。

「あ、あなたは悪くないの。病院に……セラピストの人がいて。私に優しくしてくれたし、あなたがそうしてくれたように助けてくれたの。だから退院できた後も、付き合いを続けていて」

もしかしたら……彼は華子にとっての『ジョギング』だったのか？ 誰かが側にいなければ、華子は生きていけなかったのだろうか？

その相手は俺でなくてはいけなかったはずなのに。

華子の肩が落ちるのがわかる。そこに世界の全ての重みが乗せられたかのように。立ち上がって、抱きしめて、何もかももう大丈夫だと言ってやりたい……でもできない。俺は混乱のあまり身動き一つできなかった。

「あの人と私は……合わなかった。だから私は強くなって、仕事を見つけて……自分を取り戻したの」

「そんな簡単に……別れてくれたのか？」

華子は首を振る。悔恨を表すかのように、動きに合わせて乱れきった髪が跳ね回る。

「わ、私……彼を置き去りにした。二度と振り返らなかった。きつと彼は傷ついたと思う。でもそれ以上自分をごまかせなかった。自由にならなきゃいけなかった。華子にならなきゃいけなかったの」

ようやく、筋肉が俺の意志に従って動き出す。投げ捨てたシートが床の上でくしゃくしゃの山になる。俺は何年も前にそうしていたときのように、裸のまま華子を抱き寄せる。華子の顔を自分の肩に押しつけ、自分の顔を華子の髪に埋める。俺たちは立ち尽くしたまま、十年の間に積み重なった苦しみを涙とともに洗い流す。

二人の間にあつた橋は、俺たち自身が焼き払ってしまった。黒焦げの残骸はもう俺たちの重みを支えることはできない。

だがあるいは、時間が経てば、もうひとつ橋をかけることができるかもしれない。過去の灰の上に、成熟と思いやりを材料にして。

「華子……もう離したくない……」

「久夫くん……」





four leaf studios



2017